

# なっつらぼ

設計 teco+小坂森中建築

施工 国井建設

所在地 千葉県八街市

NUTS LABO

architects: T E C O + KOSAKA MORINAKA ARCHITECTURE

千葉県八街市に建つ、木造平屋の小規模多機能型居宅介護施設。天井高約4.5mの室内には、ガラスやポリカーボネートの高窓から取り込んだ光が広がる。吹き抜け部の天井はシルバー塗装。居間・食堂の一部にはジュークをはめ込んだ引違いの建具を設け、建具を開けて居場所をつくり、個室化も可能に作り出した。



## 健康へ向かう建築の5原則

今、集まることへの不安は街の風景や建築に空洞化を生み、ITのようなスピードで対応できない実空間は暮らしの変化から置き去りにされている。これからの都市空間や建築は、いかに不安を取り除き健康な暮らしを志向することができるのか、「健康」という概念は時代や環境によって変化するものであり、WHO憲章の前文においても、肉体的な観点のみならず精神的、社会的に満たされた状態とされている<sup>(1)</sup>。健康と空間の関係に着目した中でも、19世紀、感染症や飢餓の広がる社会において医療の環境改革を図った看護師ナイチンゲールは、『住居の健康』を5つの基本的な要点「清浄な空気、清浄な水、効果的な排水、清潔、陽光」として論じた<sup>(2)</sup>。

上下水道の整備も不十分な時代の切実さが感じられると同時に、今、私たちの生きる環境を問う視点とも捉えられる。ここでは、この要点を踏まえながら精神的、社会的な視点を加え、現代における健康へ向かう建築の5原則「1陽光、2清浄な空気、3他者の余地、4律動、5調整のスキル」を提起したい。千葉県八街市における高齢者福祉施設と地域交流スペースの計画。主たる矩形ボリュームは、通い・宿泊・訪問を組み合わせた小規模多機能型住宅介護の拠点であり、面積規定に則ると、少なからず平面に個室グリッドが現れる。このグリッドを積極的に建物全体に展開しながら、前面道路へ顔を出すように三角形の土間広場を設けたり、屋根中央を断面的にすらすらして高窓を設けることで、静的なグリッドに

余白を纏う気積を生むことを考えた。まさにこれら余白の気積が、健康へ向かう建築の5原則を可能にしているのである。1陽光：建物は敷地境界からオフセットして建ち、四方へ開口部を備え、とりわけ土間広場には直射光が日時計のように差す。また、中央の居間上部の高窓により、北面のガラスを通した間接光と他三面の半透過壁のつくる柔らかい光が屋外のような明るい環境をつくる。これらにより日々刻々と変化する陽光環境を生んでいる。2清浄な空気：南の土間広場から北の高窓へ、重力換気を利用して建物のすみすみへと清浄な空気が流れる。また、地域特有の八埃(ヤチボコリ)という強い砂塵に対し、間口いっぱい設けた土間広場が居間へ抜ける風を濾すような風除室の役割を担う。3他者の余地：

居間には昔ながらの農の風景が広がり、ワークショップを通して食が新興住宅地と昔からの農家の接点となることが予想された。そこで、食を中心とした地域の人びとの活動を支えるような大きなキッチンや土間広場にも設えた<sup>(3)</sup>。福祉サービス利用者にとっては、日常生活に他者と関わる余白があることで、社会的な役割を見出すこととなるだろう。4律動(リズム)：四方の開口部や高窓が導く陽光の動きと空の移ろいといった自然現象の変化、小学校の登下校や農作業といった地域の人びとの活動が常に感じられるこの建築では、日常に律動を生むこととなる。こうした律動が、生活の営みを彩ることを想定している。5調整のスキル：軸組のグリッド下には、空気、光、音、距離感の調整を可能とする、建具

や可動間仕切りを設けている。また、柔らかい畳、ひんやり硬い土間、庇下の縁側など多種の床は、太陽の熱と共に居場所の質を変える。これら多様な質の中に過ごすことで、それらを調整するスキルを促すことになる。自らの過ごす環境をマネジメントする能力は、時代を経ることに退化しているようにも感じられるが、建築はこの調整のスキルを奪うのではなく誘発するべきだろう。この建築の計画を始めた当初は、現在のような社会状況はまったく予想をしていなかった。しかし、常にある種の切実さを抱える介護の現場に触れ、建築への大きな期待を感じてきた過程の延長に、必然的に「健康へ向かう」という建築の役割があらわにされてきたようにも感じている。(金野千恵/teco)

<sup>1</sup>: 1947年に採択されたWHO憲章の前文においては、「健康」を以下のように定義づけており、この定義が時代や環境に即して変化するものとされている。「健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、全て満たされた状態にあることをいいます(日本WHO協会訳)。」

<sup>2</sup>: ローレンス・ナイチンゲール『ノーツ・オン・ナーシング 1859』『看護覚え書』(現代社)の2章「住居の健康」の記述より。

<sup>3</sup>: 運営者をサポートするかたちでStudio-Lが協働し、竣工の約2年半前から、近隣の関わりをつくるためのヒアリングやワークショップを進めている。見守りを生業とするケアスタッフは、人びとの話の聞き取りに非常に長けている。2019年の台風災害時にも地域の各住戸を訪問するなど、地域の活動に触れ、関係づくりの土壌を育ててきた。



南東より見る。道路に沿って配置された土間広場は、軒下部分と連続したコンクリートの土間床とすることで、地域の人びとが気軽に立ち寄り、さまざまな活動に利用できる。外壁は砂壁風塗装。この地域にみられる「八埃(ヤチボコリ)」という強烈な砂埃への対応と、落花生畑の赤土の風景から引き出された。



居間・食堂から玄関を見る。柱は全面音の黒目地張りのとした。柱は各所共通して120mm角。梁の厚は170・150mm角。建具のシーリングは木枠なしで梁に直付けのガラスとし、特殊な取付も想定しやすい仕組みとした。



居間・食堂の天井(夕方)。時間の経過を、高さから取り入る光の移ろいから感じ取ることができる。シルバー塗装の天井により、光を柔らかく拡散する。



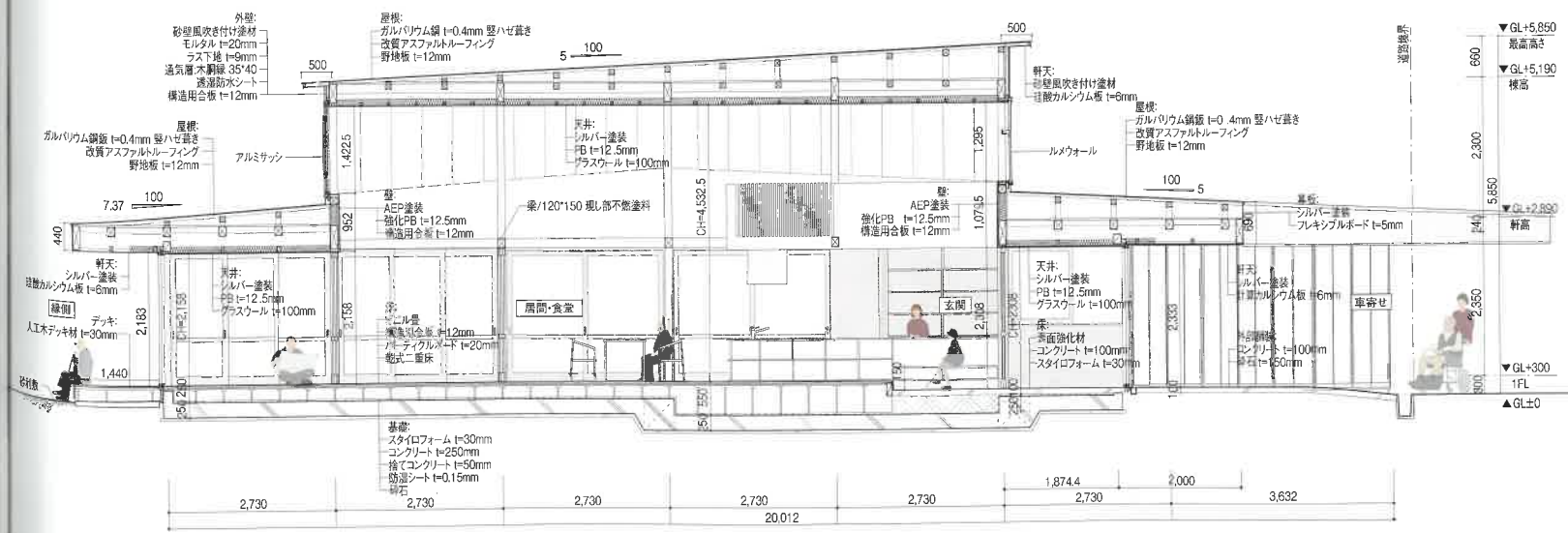
居間・食堂から土間広場を見通す。天井の高さの違いや建具の有無の組み合わせにより、グリッド状の形式の中で雰囲気の異なる居場所をつくる。



車庫から玄関と居間・食堂のキッチンを見る。キッチンのカウンターには土間部分にベンチを設けた。キッチン上部は設備スペース。

天井高の異なる空間を持つ木造平屋の計画

東西に配置された低い屋根の諸室にある居住空間に利用し、吹き抜け部に、梁をそのまま連続させることで、建物全体の挙動を揃えるとともに、高い屋根を支える柱の座面仕上げを兼ねている。多くの木造住宅が小屋組と屋根組を一旦切り離して考える「和小屋」として発展しているため、プレカット技術もその形式に依存しており、できることが限られるため、このプロジェクトでも柱脚部はまさに小屋梁の上に屋根組を組み立てて構成し、高い屋根では、低層小屋梁の上に高い屋根が載った。「和小屋的」な構造形式を採用している。「和小屋的」な構成をすることで、構造的合理性とあわせて、既存のプレカット技術でできる経済性、技術的合理性に配慮した架構を実現している。  
(木野博史/オーノJAPAN)



断面 縮尺 1/120



